

平成29年度 第1回学校評議員懇談会（兼SGH評価委員会）議事録

1. 期 日 平成29年6月13日（火）
2. 時 間 15:00～17:10
3. 会 場 長野高等学校大会議室ほか
4. 出席者 学校評議員6名
竹前紀樹氏（朝日ながの病院長）、中村正行氏（信州大学工学部教授）、南波克彦氏（上松区長）、藤井純子氏（東口メンタルクリニック臨床心理士）、松本 清氏（長野運送株式会社社長）、森山奈々氏（長野市PTA連合会副会長）【アイウエオ順】
学校職員12名
5. 日 程 開会・SGH事業説明 15:00～15:10
授業見学 15:10～15:30
懇談会 15:40～17:10
6. 懇談会内容（司会：小川・山崎 記録：永井）
 - (1) 学校長より：班活動の報告、SGH活動の報告、進路状況、生活実態調査結果にみる生徒の様子、学校評価について説明。
 - (2) 自己紹介
 - (3) 意見交換
 - ①SGH事業の成果と今後のあり方
 - 小川教頭：本校のDP（ディプロマ・ポリシー）とCP（カリキュラム・ポリシー）の案、高大接続システム改革、SGH事業終了による教育環境の変化の三者を見すえながら、探究的・協働的な学びのこれからについて考えていきたい。今日はいくつかの観点を提示するのでご意見をいただきたい。
 - 探究的・協働的な学びの質を高めるためのアドバイス
 - ・中村委員：授業参観でAIを研究したいという班に、AIならば牛井屋に行けばわかるとアドバイスした。昔のAIはあらゆる場合分けをする形でしか動かなかったが、現在のAIは多様なコネクションをもち、未来予測すら可能になっている。教育もAIのようになってきている。画一的に学ぶスタイルから、多様なコネクションのなかで学ぶスタイルへの変化だ。これは大学教育でも実感している。大学は入試で輪切りになって入ってくるから、入学時の学力に差がないように見えるが、4年間で大きな差がでる。それは1年次に「学び方」を知っている学生とそうでない学生（指示されたことしかできないタイプ）との差である。前者は、アクティブに何か学ぼうとして、いろんな失敗をしながら、そして周りの人とコミュニケーションを取りながら学ぶ学生である。
 - ・中村委員：調べ学習においては、たくさんの情報や色々な機関のサービスとのコネクションを学校側が持っていないと、深い学習につながらないところもあるのではないかと。大学との連携はその点で役立つ。連携が深まれば、メール一本で質問ができるはずだ。
 - ・松本委員：商工会議所もNAGANO検定を実施したり、新しい魅力的な冊子を作ったりして、長野の魅力のアピールに力を入れている。参考になるのではないかと。

○参観した授業に対するコメント

- ・藤井委員：探究的・協働的な学びの根底には、ひとりひとりの生徒が「面白い」・「自分でも探究したい」という思いをもつことが必要になってくると思う。やはり一人ひとりの興味をどう育てるかということが鍵になってくる。そのためにはどうしても手間がかかるわけで、SGH指定が終わった後、教員定数の加配が廃止されるようなことがあると、先生方の負担がとても大きくなるだろう。

○本校が地域から信頼され、憧れをもたれる学校であるために必要なことは何か

- ・竹前委員：先日の公開授業の際の「米国リーダー研修報告会」を参観した。あの報告会は、地域の小中学生に長野高校に対するあこがれをもたせられる内容だと思った。「長野高校に行ったら〇〇ができる…、例えば、米国リーダー研修ができる、そこでハーバード大学でプレゼンテーションができる…」といったあこがれを小中学生にもたせられている。このようなことはとても大切だ。
- ・南波委員：現在、県教育委員会は「信州学」を推進している。「信州学」のような地域の学習をすることで、地域の魅力や努力を学び、そのことが大学進学で一度故郷を離れてもやがては地域に戻ってきて活躍することにつながることを期待したい。上松区という長野市で最も人口の多い区の区長をつとめていると、地域の高齢化の深刻さを強く感じている。若者が地元で独立して生きて行けるような地域づくりをすることと、それを視野に入れられるような若者を育てる教育の双方が必要だ。
- ・森山委員：小中学生の親として、これまでSGHについてまったく知らなかった。長野高校とかわりをもたせていただいて、初めてSGHの魅力を知ることができた。我が家の小学生は、かるた大会で長野高校の生徒さんと交流ができて喜んでいる。生徒さんと小中学生がふれあうような交流の機会と、長野高校の情報発信の双方が必要だろう。
- ・中村委員：大学は広報活動にお金と労力をとてもかけている。そういう時代である。公開授業で小学生向けのチラシを作った取組についても継続してやる必要がある。一度だけでは効果はあがらない。あとは足で稼ぐことも大切だ。大学の教員もさんざん高校回りをする。長野高校の広報の際にDP図を持参することをするとよいのではないか。
- ・南波委員：自分の仕事の経験からいっても、広報というのは、少し長い目で見ても継続して行かないと、効果の有無はわからないものだ。

○本校が育てる人間像の具体的なイメージ（DP図に関わって）

- ・松本委員：SGHは、高校生がやがて社会に出るときの疑似体験的な学習でもある。フィールドワークから様々なことに触れ、「fact」を見抜く力が養成される。何が「fact」なのかを見極める能力はとても大切なことだ。また、社会に出ると理不尽なことにさらされることが圧倒的に多くなる。そんななかでぶれずに生き抜いていけるためにも、教員が高校生に「突っ込み」を入れて鍛えることが必要だと考える。
- ・藤井委員：高校生が心理的に自立していくためには、親以外の大人を見るなかで自分の目標の生き方を持つことが大切である。SGHの学びは、そのための格好の機会である。たとえば、

大人が地域を活性化させようと奮闘する姿を高校生が見て、憧れるとする。そのとき大人の側も高校生に励まされ、より一層頑張ろうとするだろう。そのような相互作用、循環ができることが望ましい。

- ・藤井委員：DP図には、「生きる」という要素をもっと前面に出していいのではないかな。そして小学生にもわかりやすいようなものにする必要がある。
- ・中村委員：DP・CP図には、できればAP（アドミッション・ポリシー、こうした生徒を求めるといふ方針）が書き込めればよい。それですべてが揃う。

○教科学習と探究的な学びの接続に対するアドバイス

- ・中村委員：教科の授業で「応用分野」に触れることを、大学では重視するようになっている。総合的な学習の時間のほうから教科学習に繋げることは難しいが、教科の授業で「応用分野」を扱っていると、学んだことが次にどのようにつながってくるかという探究の面が出てくる。
- ・中村委員：長野県には「キャリア教育ガイドライン」が策定されている。SGHの成果をキャリア教育のガイドラインに当てはめて発信していくのはどうか。

○事業の大幅な統廃合、組み直しを推進する際の留意点は何か

- ・竹前委員：自分のかつての病院経営では、単科があまりに細かく分化しているところを、センターをつくって統合した。知識・技術が進歩して細分化が進んだことを、もう一段高いレベルで統合して組織をつくることを行った。
- ・中村委員：大学の研究者は予算を確保するために必死に申請書を書く。次々に申請書を書いている。予算がなくては始まらないことが多い。学校を発展させようとするときに、そうした姿勢は必要かもしれない。

②定時制の現状と課題

- 岸田教務主任：学年の年齢構成、不登校経験者の本校での様子について説明。卒業後も次のステップでいかせる社会性を身につけさせたい。
- 竹前委員：今年の卒業式の定時制生徒の答辞はすばらしかった。あのような言葉を言える高校生を育てることは大切だと思う。

(4) 学校長より御礼の挨拶